

タスマニア州におけるアドボカシー活動の試み

－Nihongo Roadshow の事例から

千馬智子・中島豊

〔キーワード〕 アドボカシー活動、複合型事業、ネットワーキング、学習者奨励活動、他機関との協働

〔要 旨〕

国際交流基金シドニー日本文化センターでは、従来教師研修や学習者奨励活動などの事業を行ってきた。しかし近年は全豪日本語教育シンポジウムの実施などを契機としアドボカシーの重要性にも目を向けており、そのパイロット事業として、タスマニア州においてアドボカシー活動を試みた。本稿では、従来当センターが個別に行ってきた教師研修、学習者奨励活動などの事業をアドボカシーの観点から複合型事業として発展統合した、タスマニア州における Nihongo Roadshow の概要を報告する。また、参加した教師から得られたフィードバックの分析を通じて、本企画がもたらした効果について考察する。さらに事業全体から得られた示唆や今回の試みによって見えてきた課題について述べる。

1. はじめに

本稿では国際交流基金シドニー日本文化センター（以下、「当センター」）が2015年3月に実施したタスマニア州の学校コミュニティにおけるアドボカシーの試みについて報告する。これは、従来日本語教育事業の一環として、それぞれ独立して行われていた教師研修及び学習者奨励事業などの当センターの事業を、アドボカシーの視点からとらえ直し、複合型事業として Nihongo Roadshow と名付けタスマニア州各地で実施したものである。限られた時間と予算の中での企画であったが、学習者へのポジティブな学習体験の提供（学習者奨励事業）を中心に、保護者を対象とするアドボカシー、日本語教師ネットワークの強化（教師へのアドボカシー）、学校長をはじめとする学校コミュニティを対象とするアドボカシーが達成できた。しかし、同時にいくつかの課題も明らかとなった。

以下、本件事業の実施に至る経緯を紹介したのち、企画全体像を詳述する。次いで、参加した教師からのフィードバックを分析し、この企画から得られた成果、課題及び今後の展望についての考察を行う。

2. 背景

2.1 実施に至る経緯

当センターは、各州の教育省日本語教育担当者、日本語教育アドバイザー、日本語教師会代表者、初中等教育に関連の深い大学関係者、主要カウンターパート等を招聘し、オーストラリアの日本語教育の現状について意見交換を行う Advisory Committee Meeting (ACM) を毎年開催している。当センターの実施する日本語教育事業の在り方についての提言を得るとともに、当地日本語教育界の主要関係者のためのネットワーキングの場としても定着している。

2013年の ACM において、タスマニア州日本語教師会 (Japanese Teachers Network in Tasmania : JATNET) の代表より、タスマニア州では、学習者が日本人や日本文化と直接触れ合う機会が限られているため教室内での日本語学習活動が実際に意味のある活動になりにくいと感じている教師が多く、当センターが日本文化紹介などの機会を提供することが望まれるとして、タスマニア州における日本語教育活性化への協力要請が寄せられた。シドニーやメルボルンといった日本人が多く居住し、街を歩けばいたるところで日本食レストランなどが散見される大都市とは異なり、州都ホバートであっても日本との繋がりを実感する機会が圧倒的に欠如しているため、結果として日本語を学習することの意義が感じられない (lack of sense of relevance of learning) という状況があるとのことであった。

当センターにおいても、頻繁に教師研修等で日本語教育関係者らとの接触の機会がある大都市に比べ関係が弱いタスマニア州への支援強化の必要性を感じていたこともあったため、この提案を奇貨とし、タスマニア州における学習者奨励事業を計画することとなった。なお、タスマニア州はオーストラリアの人口23,581,000人のうち2.18%である515,000人を擁しており (2014年国勢調査⁽¹⁾)、オーストラリアの全日本語学習者 (296,672人) の1.26%である7,677人がいる (国際交流基金2013)。

2.2 企画段階

通常当センターが行っている学習者奨励事業は、弁論大会、Video Matsuri 等のコンペティションや日本映画祭の一部としての日本語学習者向け映画上映会など年1回の定例イベントが中心となっている。今回は協力要請を受けての企画ということで学習者奨励活動の内容を一から検討する必要があったため、当センター日本語教育担当プログラム・コーディネーター⁽²⁾ (以下、「コーディネーター」) が現地に出張し、教師の要望、利用可能施設の状況、及び現地の協力体制等を調査することとなった。

JATNET 中心メンバーとの意見交換を踏まえ、本件事業では学習者が参加可能な巡回型の日本紹介をすることとなり、その中核にクイズ大会を据えることとなった。効率や予算などを勘案し、2つの小規模チームに分かれてタスマニアの主要都市を手分けして巡回する形を採用す

ることとした。各チームは日本語専門家と英語ネイティブで日本語に堪能なコーディネーターの2名1組とした。現場での実際のコーディネーション業務はもちろんであるが、特に日本語能力の低い大人数の若年学習者を相手にイベントを進行する必要があることから、英語ネイティブの参加は必須と考えた。また、タスマニアはオーストラリアの他の地域に比べても欧米系の住民が多いため、日本語を自由に操る欧米系オーストラリア人をロールモデルとして目にするだけで、決して日本語は自分たちにとって手の届かないようなものではないと子供たちに感じてもらいたいという意図もあった。

上述のように本企画は、学習者奨励活動を中心とする企画として始まった。しかし事業を計画する過程で、多額の予算と人員を投入するに相応しい、より充実した内容とするべきではないかとの議論が持ち上がり、その結果アドボカシー活動を主眼とした複合型事業へと発展することとなった。この背景としては、2012年に行われた第1回全豪日本語教育シンポジウム（NSJLE）⁽³⁾に於いてアドボカシーの重要性が再確認されたこと（詳しくは、シンポジウム論集にある Tohsaku, 2014；Spence-Brown et al, 2014 を参照のこと。）に加え、近年オーストラリアにおいて校長や政府レベルの意思決定者を対象とした中国招聘事業の実施やアシスタント派遣などの中国語プロモーション強化が顕著なことによる危機感などがある。

アドボカシーの視点導入に伴い、学校長・保護者への説明会及び教師同士のネットワーク強化を目的としたアドボカシーを担う第3のチームを編成し、筆者ら（日本語上級専門家及び日本語教育担当派遣職員）に加えて、メルボルン日本語教育センター（MCJLE）所長 Anne de Kretser 氏にも協力を仰ぎ、3名でアドボカシーを担当することになった。MCJLE は日本語教育の雄モナシュ大学の一組織としてビクトリア州、南オーストラリア州、タスマニア州の3州における日本語教育支援を行っており、前述した NSJLE の共催団体でもある。de Kretser 氏と筆者らは、頻繁な意見交換を通じて日本語教育支援についての方向性を常に共有しており、かねてより Tohsaku (2014) の提唱するアドボカシーの3つの重要な柱、1. Be visionary teachers、2. Add value to our Japanese language teaching、3. Constantly raise our visibility in the community を具現化するようなアドボカシー活動を、特に遠隔地において共同実施したいとの構想を温めていた。同氏は現在注目を集めている全豪統一カリキュラム（Australian Curriculum⁽⁴⁾）についても造詣が深く、全豪各州に招かれて教師研修を行っている著名な教育者（元学校教員）である。同氏のタスマニアでの日本語教育事情への深い知見及び知名度を得ることで、今回の企画は一層強化されることとなった。

3. 企画概要

3.1 全体スケジュール

上述の通り、本事業は従来当センターが個別に行ってきた事業をアドボカシーの観点から複合型事業として発展統合し、それぞれのイベントの有機的結び付きによる相乗効果を狙ったものである。各イベントとは上に述べた学習者奨励事業としてのクイズ大会に加え、教師ネットワーク（教師研修的要素を含む）、学習者と保護者のための映画上映会、また校長との面談の4つである。本節では企画の詳細を個別に記し、次節では複合型企画としての評価を考察する。なお、3組による主要各都市の巡回スケジュールは表1の通り。

表1 Nihongo Roadshow 巡回スケジュール

	クイズチーム A/Hobart 担当	クイズチーム B/北西部担当	アドボカシーチーム
10日(火)	初等用クイズ大会 Y3-6 (10:00-14:00) 初等用映画上映 (18:45-21:00)		<u>Hobart</u> 小学校校長対象説明会 (11:00-11:30) 保護者対象説明会 (18:30-18:45)
11日(木)	初等用クイズ大会 Y3-6 (10:00-14:00)	<u>Launceston</u> 中等用クイズ大会 (9:30-12:00) ホスト校用セッション (14:00-15:30) 初等中等用映画上映 (18:45-21:00)	<u>Launceston</u> 教師ネットワーク (16:30-18:00) (ホスト校校長参加) 保護者対象説明会 (18:30-18:45)
12日(木)	中等用クイズ大会 Y7-12 (10:00-14:00)	<u>Devonport</u> 初等用クイズ大会 (10:00-14:00) 初等中等用映画上映 (18:45-21:00)	<u>Devonport</u> 校長対象説明会 (11:00-11:30) 教師ネットワーク (16:30-18:00) 保護者対象説明会 (18:30-18:45)
13日(金)	中等用クイズ大会 Y7-12 (10:00-14:00) 中等用映画上映 (18:45-21:00)	<u>Burnie</u> 中等用クイズ大会 (10:00-12:30)	<u>Hobart</u> 教師ネットワーク (16:30-18:00) 保護者対象説明会 (18:30-18:45)

3.2 学習者奨励活動

学習者奨励活動の内容として、当初はより学習重視型の活動を想定していたが、現地教師からの要望も踏まえた上で、以下の理由から最終的にクイズ大会とした。まず、学習者が集中しやすく、競争的要素があるために盛り上がりやすいこと、また大人数に対応でき、かつ時間調整が容易であること、さらに日本語教育の専門家ではないコーディネーターにも担当できることである。

問題作成に当たっては、Intercultural Language Learning⁽⁵⁾（以下 ILL）及び全豪統一カリキュラムを意識した。ILL の理念を具現化するためには、学習対象言語の文化背景や社会事情を知るだけでなく、自らの言語および文化や社会事情について考察する（ジョナック他 2008）ことができるような内容となるよう、学習者が楽しみながら①「日本及び日本語についての知

識を得る」、②「タスマニアと日本のつながりを意識する」、③「文脈の中で意味のある日本語を聞く」の3点をクイズ大会の目的に据えた。また、全豪統一カリキュラムの理念を実現するためには、同カリキュラムが General Capabilities⁽⁶⁾として目標に掲げる7つの柱のうち2つをカバーすることを目指した。ひとつは Personal and social capability で、学校の垣根を越えた協働を通じて参加者が日本語学習者としての自分についての理解を深めることがそれに該当し、もうひとつは Intercultural understanding で、前述の ILL の理念とも共通するものである。

クイズはすべて四択で、パワーポイントを使用し、できるだけ映像や動画を用いて視覚的なサポートが得られるようにした。正解確認の後には解説スライドを見せ、学習効果を生むデザインとした。学習者の日本語能力などを考慮し、進行は主に英語で行い、クイズの問題文の表示も英語を基本としたが、日本語での発話を多用することを心掛けた。また、クイズの合間にはけん玉リレーや人気テレビアニメ「妖怪ウォッチ」より「ようかい体操第一⁽⁷⁾」などの体を使うアクティビティー等も織り交ぜた。

クイズ大会はチーム制とし、回答はチームメンバーの合議で出すルールを設定した。現地教師からは自分の生徒を一括して監視することができなくなるなどの不安の声もきかれたものの、最終的には当センターの意向通り各チームは複数の学校の学習者からなる混成とした。これは、他校の日本語学習者と交わるにより自分が日本語学習コミュニティの一員であり、自分の周囲にも日本語学習者がいることを参加者に意識してもらうことを狙ったものであったが、この試みは成功だった。

クイズは4都市で計8セッション行い、29校から602人が参加した。できるだけ多くの学校に参加してもらうために1校からの参加者数を15人までと制限したため、学校によってはクラス全員が参加できず、教師が学外に引率しにくい状況が発生した。次回への課題である。しかし、結果として、参加した生徒が参加できなかった生徒にいかにか楽しかったかを伝えることとなり、ニュースが短時間で広がるという予想外の効果が生まれた。

なお、クイズ大会実施直後に実施したアンケートでは全参加生徒602人中546人(90.7%)からの回答が得られた。「全体として、今日のイベントを楽しめたか(Overall, did you enjoy today?)」という質問には、4段階(4が「とても楽しめた」、1が「とてもつまらなかった」)評価で、369人(67.6%)が4、155人(28.4%)が3をつけ、合計で524人(96.0%)が好意的にとらえており、学習者奨励活動として成功であったと考えられる。

3.3 アドボカシー活動

3.3.1 保護者へのアドボカシー

初中等教育段階においては生徒が選択科目を決める際の保護者の影響が大きく、保護者に外国語学習への理解がないと高学年まで学習を継続することは難しい。保護者に日本語教育の有

要性を理解してもらうことが重要であるが、保護者を対象としたアドボカシーといっても、単に日本語学習の重要性を訴える説明会を実施するだけでは多くの参加は望めないと想定されたことから、映画上映会という形をとることになった。つまり、子供向け上映会を企画した上でそこに保護者も招待し、映画開始の前に15分～20分程度の保護者向けのプレゼンテーションを実施することとした。映画上映会場はクイズ大会ホスト校内の施設での無料上映とし、対象年齢に応じて初等用と中等用の2作品を用意した。

プレゼンテーションは「なぜ日本語を勉強するのか」とのテーマのもと、日本語はオーストラリアで最も学習されている外国語であること、日本は安全な国であり教育旅行先として最適であること、外国語を学習することによってリテラシー能力が深まると同時に異文化理解能力が養われること、同じような履歴なら外国語ができる方が雇用されるチャンスが増えること、また外国語を学習する際に身に付けたストラテジーが大学やそれ以降の学習に生涯にわたってプラスの効果を与えることなどについて de Kretser 氏が説明した。

しかし実際には当方の意図に反し、保護者は会場まで子供を送った後そのまま帰ってしまうケースが散見された。これは上映会の広報を一任した現地オーガナイザーである各都市の取りまとめ役日本語教師に企画者側の意図が十分伝わっていなかったことが原因と考えられる。それぞれのイベントの関連性や目的について明確に文書化し、現地オーガナイザーだけでなく参加校の日本語教師にも配布し、企画側だけではなく受手側も事業コンセプトに対して同様の理解を持ってもらうことが必要であった。次回からは、より多くの保護者に参加してもらえるよう現地オーガナイザーとの意思疎通を徹底し、事前広報をしっかりとすることが課題である。

3.3.2 日本語教師へのアドボカシー

日本語教師を対象にしたアドボカシー活動として、教師が集う場を3都市で設定した。この目的はネットワーキングの機会の提供にとどまらず、クイズ大会のフィードバックを教師同士で共有すること、それを通じ日本語教育のもつ価値を再認識してもらうこと、また教師にアドボカシー活動の必要性を認識してもらうことにより将来的には教師ひとりひとりがアドボカシー活動の実践者となれるよう意識を高めてもらうことにあった。

終業後は業務関係の活動をしつづける教師も多く人数を集めるのが困難であることが想定されていたため、気軽に参加してもらえるように早めの16:30からの開始、かつ短時間で終わらせることにし、広報の際も名称を「ネットワーキング・ドリンク」として参加したくなる要素を増やした。また、リラックスしたムードでざっくばらんに話をしてもらうため梅酒やオーストラリアで作られている日本酒などを持ち込み雰囲気づくりを行った。なお、当地では金曜日の放課後などに教員同士学校内でグラスを傾けつつ親睦を深めることが一般的であるため、学校内でのアルコール提供に特段の違和感はない。

ネットワーキングの内容は、2部構成でインフォメーションセッション及び懇談セッションとした。前半は、当センター及びMCJLEより情報提供を行った。当センターからは国際交流基金の助成プログラムや学習者向けイベント、及び当センターが開発したClassroom Resources サイト⁽⁸⁾の使い方などを紹介し、次いでde Kretser氏よりMCJLEの提供する各種プログラム及び、Australian Curriculumに関する説明の後、上述の保護者用プレゼンテーションを引用しつつアドボカシーの考え方とその重要性を共有した。その後は懇談となったが、熱心な教師からは多くの質問が挙げられ、活発な質疑応答の時間となるケースもあった。帰り際には、貴重な仕事後の時間を割いて集まってくれた参加者への手土産として、総領事館及び日本政府観光局（JNTO）から提供を受けたポスターや日本地図などを配布した。

参加者数はローンセストン7名（うち1人はホスト校校長）、ホバート15名であったが、平日の夕方の実施であったこと、またタスマニア州における日本語教師の数（2012年日本語教育機関調査で78名）を考えると、この人数（全体の28.2%）が集まったことはある程度の成果と考えている。同じ街で日本語を教えている教師同士であっても、ほとんど顔を合わせることはないとのことで、このような機会に自身の持つネットワーキングを再確認できたことへの喜びの声が寄せられた。同じような悩みを抱えて日々授業行っている教師は少なくないと思われるため、気軽に相談できる近くの同僚を再発見できるという意味においても、この類のネットワーキングの機会の提供は当センターがより積極的に貢献していける分野ではないかと思う。

なお、結果として集まったのは中等教育段階の教師が多かった。初等教育段階の教師と当センターの、また教師同士のネットワーク促進・強化が今後の課題である。

3.3.3 校長へのアドボカシー

校長の権限が大きいオーストラリアにおいては学校で日本語教育が継続されるか否かは校長の裁量ひとつで決まることがよくある。そのため、校長へ日本（語）の魅力をアピールしていくことは最も直接的なアドボカシー活動と言える。

クイズ会場を提供してくれたホスト校の校長のみではなく、近隣校の校長にホスト校に集まってもらいクイズ大会を見学してもらった上で懇談会を行うというのが当初の計画であったが、最終的にはホスト校の校長にのみ話を聞いてもらう結果となった（ただし、これも全ホスト校で実施できたわけではない）。この理由は、あらかじめ予想していたこととはいえ、校長はかなり忙しくなかなか時間を割いてもらうことが難しいことに加え、連絡の時期が直前となってしまったことによるものと考えている。今回は学習者奨励活動を見学してもらうという名目を掲げて複数の校長をホスト校に招待するという目論見であったが、結果的に成功しなかった。仮に連絡を前広にしたとしても、校長に集まってもらうのはかなりハードルの高いことである。複数の校長に一度に会う機会をどのように設けるか、次回へ向けて検討課題を残す結果となった。

数少ない校長との面談の機会では、当センター及び MCJLE の活動と提供可能な助成および教師研修のプログラムについて説明した。また、オーストラリアの日本語教育は長い歴史があり、日本語教師は概して質が高い上に層も厚く、日本語にはカリキュラムに合致した教科書や教材も数多く揃っているため安定しており、学習者にとって継続して学びやすい環境が整っていることを強調した。事実オーストラリアにおいて日本語は最も学ばれている外国語であり、他言語に比して高学年まで継続する生徒も多く (de Kretser & Spence-Brown, 2010)、しっかりと学校教育に根を下ろしている (Lo Bianco, 2009)。また、その学校の日本語教師についても、いかに熱心に活動している素晴らしい教師であるか第三者である我々から意識的に伝えるように心がけた。

しかしながら、オーストラリアの学校長は経営者としての役割が濃く、具体的な支援パッケージを示さないと魅力的に映らないという懸念がある。実際、中国等からは助手派遣や教材寄贈、訪中機会の提供などの申し出があるとのことであり、今後校長にアピールする機会の創出に成功した場合に、日本 (語) としてどのような具体的なメリットを提示できるか、国際交流基金全体としても検討が急務であると思われる。

なお、今回は期待したほど多くの校長と直接は面談ができなかったこともあり、イベント終了後、面談しなかった校長も含めクイズ大会に参加したすべての学校の校長に対し、いかにその学校の生徒が熱心で優秀であったか、いかに素晴らしい日本語教師に恵まれているか、また、このようなイベントへの参加を承認した学校長の教育的イニシアティブに感謝するという内容のアドボカシー目的のレターを発送した。

4. フィードバック

アドボカシーの効果はすぐに表れるものではなく、また学校長や保護者等の対象者から直接アンケートを取ることが難しい。そのためここでは学習者、学校長、保護者と直に接する立場にある引率した日本語教師を対象に約3ヶ月後に実施したフィードバックの分析を通じて、本企画がもたらした効果について考察を試みる。実施方法は Google フォームを利用したオンライン形式で無記名とし、全27人に依頼し12人より回答を得た (回答率44.4%)。

4.1 学習態度の変化

1つ目の質問、「(イベントに参加した後) 学習者の日本語学習に対する態度に変化がありましたか? (Have you notice any changes in your students' attitude towards Japanese learning? Please provide details.)」との問には1人を除き、全ての回答者から肯定的なコメントがあった。生徒の日本語学習意欲が高まったという内容が最も多かったが、中でも1-1、1-2、1-3に見られるような、日本語学習がより「リアル」なものになった、タスマニアと日本の関係について

学習者が興味を持つようになったという回答に注目したい。これは、JATNET から報告があった「タスマニアでは学習者が日本人、また日本文化と直接触れ合う機会が限られているため、教室内での日本語学習活動が実際に意味のある活動になりにくい」と感じている教師に対して、解決の一方策を示すことができたのではないかと考えている。

また、他の学校との交流が学習動機を高めることになったという回答（1-4）については、当初現地の日本語教師の多くが複数校による混合チームを作ることに極めて否定的であったことを考えると、結果として当センターの意図したところ（学校間対抗となることの回避、及び他校の学習者との交流を通じた日本語学習のコミュニティーの一員であることの自覚）を理解してもらうことができたと言ってよい。

さらに、学習者による波及効果についてのコメントも寄せられた。実施直後にも聞かれたことだが、参加した生徒が参加しなかった生徒に今回の企画がいかに素晴らしい体験であったかを語る場面が学校内で多々見られるということである（1-5）。半日程度のイベントであっても、学習者にインパクトのある学習機会を提供できれば相当な波及効果が期待できるという手応えを感じた。

表2 「学習者の日本語学習に対する態度に変化がありましたか？」への回答

- Opened their eyes more to Japanese language and culture. It has made learning Japanese much more 'real' (1-1)
- Students were interested in Tasmanian connection with Japan. Positive attitudes were reinforced. (1-2)
- Much more appreciative of hearing and responding to Japanese instructions in the classroom, after seeing Japanese people giving genuine instructions. (1-3)
- Generally they feel very comfortable practicing vocab as they know they are all learning at a similar level (to other schools). Motivated to learn more. (1-4)
- 参加できた子供たちは、日本語のレッスンがより楽しいようです。また、自信をもって自分たちの体験をクラスメイト達に話しています。(1-5)

4.2 教師の変化

2つ目の質問は、「日本語の教え方について、または教室内での実践についてあなたの考え方に変化はありましたか（Have there been any changes in your thinking regarding Japanese teaching or in your classroom practices?）」というもので、このイベントの教師研修的側面に焦点を当てたものである。まず、クイズを使った学習を自分でも教室活動に取り入れたという直接的な回答があった（2-1）。教室活動を豊かにすることが可能となった一例と言える。また、クイズのテーマのひとつとして取り上げた「日本とタスマニアのつながり」との関連では、自分の教室でも日本とタスマニア、そして日本とオーストラリアの関係について積極的に発信していきたいというコメントが見られた（2-2、2-3）。こういった教師の気づきもたらす授業活動の充実、学習者にとって学習対象と自身の関係性が明確になることにつながるため、日本語学習がより具体的で意味のあるものと感じることができるようになるのではないかな。

次の2-3及び2-4の例では、自身の教室活動でも日本語（での発話）を多く取り入れるきっかけとなったとの回答があった。参加者のほとんどがN5に満たない日本語力であっても意味のあるコンテキストで日本語に触れてもらえるように、クイズの進行にあたっては日本語での挨拶や指示を多く取り入れたが、それが評価されたと言える。

クイズ大会は一義的には教師研修として企画したものではないが、クイズ大会の進行を担当した日本語専門家がどのように日本語を織り交ぜながら学習者を活動に引き込むか、そしてそれに学習者がどのように反応するかを具に観察してもらうことにより、教師研修としての効果が得られたと考えられる。また、引率した日本語教師にとっては他校の学生の日本語力を知る機会ともなり得たと思う。

表3 「日本語の教え方について、または教室内での実践についてあなたの考え方に変化はありましたか」への回答

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ● I learnt a lot about how to present a quiz. I did some quizzes - kids loved the competitive aspect of the Roadshow. (2-1) ● I'm trying to include more Japanese pop culture and am making clearer to students the Tasmania-Japan relationships that exist. (2-2) ● Has made me use simple instructions and increased my level of Japanese usage in the classroom. (2-3) ● I really liked the way simple greetings and instructions were spoken in Japanese and my students were so excited to understand this language. I have continued to use this vocab in the classroom. I plan to mention more about connections between Australia and Japan. (2-4) |
|---|

4.3 学校コミュニティへの影響

次の質問では、アドボカシーの観点から、学校や学習者の家族の態度に何か変化があったか（Have there been any changes in the attitude of the school community and students' families?）を問うた。この設問に対しては、「No」や「もう少し長期的に観察してみないことにはなんとも言えない」といった回答もいくつかあったが、全体としては肯定的な回答が寄せられた。

家庭へのアピールの役に立った例として3-1では学校のニュースレターに今回のクイズ大会の記事を載せたとのことである。また、3-1、3-2では、自分の子供が今回のイベントに参加できてよかったとのコメントを保護者が教師に伝えてくるケースが報告された。さらに、3-3では校長から労いの言葉がかけられるなど、学校長レベルでも今回の企画が認知されたことが窺えるものがあった。また、3-4の学校では、Roadshowを年間行事に組み込みたいという意向が出ているとのことで、このイベントが当該学校コミュニティにとって有益であったと評価されたものと考えられる。これが一過性のもので終わらず、学校内で日本語教育の価値が再認識されることが期待されるが、そのためには、何人かの教師が回答で指摘したように、さらに中長期的な視点にたつてのフォローアップが必要であろう。

表4 「学校や学習者の家族の態度に何か変化があったか」への回答

● I published an article in the school newsletter and several parents came up to me to comment on how much their child loved the learning experience of the Roadshow. (3-1)
● Individually, some parents said how happy they were for their children to attend. (3-2)
● I put together a newsletter article for 2 schools in which each child wrote a comment. They were brilliant! The principal of the school commented on what a wonderful day the kids had had and complimented me on the article. (3-3)
● The school community is very keen for the Japanese roadshow to be annual event that can be offered to students. (3-4)

4.4 その他のコメント

最後に、その他のコメントや感想を質問した (Please give us any further comments and impressions of the day.)。回答には次回に向けての示唆を含む貴重な意見が寄せられた。まず、次回は高学年 (Y11-12⁽⁹⁾) も参加させたいというもの (4-1) や、もっとクイズを少なくしてけん玉のような体を動かすアクティビティーを多くしてほしい (4-2) など、対象レベルや構成に関わる要望があった。

また、複数校の生徒からなる混成チームとしたことについては好意的な声が多かった (4-2、4-3)。最初は戸惑っていた参加者が時間の経過とともに打ち解け、互いの知識を持ち寄って課題を遂行できたことは、学習者と引率した日本語教師の双方にとって良い刺激となったことと思う。特に学習者にとっては日本語を学んでいる仲間が自分の教師や学校の外にもおり、学習者自身が広い意味での日本語学習コミュニティの一員であるという自覚が得られたのではないかと考えられる。さらに、ネットワーキングに参加できなかった教師にとっては、他の教師とクイズ会場で顔を合わせ近況を報告しあうだけでも十分に意義があったようで、他の日本語教師と会えたことを評価点として挙げた教師もあった (4-5)。

表5 「その他のコメントや感想」への回答

● Next time I would like to bring my seniors along as well. (4-1)
● In general, it was great. However, there could perhaps be a few less quizzes and a few more hands-on get-up-and-do activities like the kendama challenge in the latter part of the day as children became a bit restless waiting for their 'turn' in the quiz. (4-2)
● The students were able to 'show off' their knowledge and by mixing with students from other schools were able to bounce ideas from each other. (4-3)
● Students loved the day – tentative at first when they were split up and put into groups with unknown children, but by the end of the day, they were so excited about the day and meeting new people. (4-4)
● It was good as a teacher to have the opportunity to network with other Japanese teachers in the area. (4-5)

5. 複合型事業としての考察

ここまでは本企画を個別にみてきたが、本節では複合型事業としての側面に注目して総括し、成果と課題を考察したのち、今後の展望を述べる。

5.1 成果と課題

一番大きな成果としては、同時にいくつかのイベントを行うことでそれぞれの事業が有機的に作用しあい、相乗効果が生まれたことが挙げられる。まず、本件事業の中核である学習者奨励事業の成功による①「学習者へのポジティブな学習体験の提供」があるが、これを前提として、②保護者へのアドボカシー、③教師へのアドボカシー、④校長へのアドボカシーが達成できたと考えている。

つまり、②については、学習者がそれぞれの家庭で日本語学習の楽しさや今回のイベント（①）への期待を語っていることが大きな要素であると考えられる。実際に、アドボカシーチームが開催地のカフェで朝食をとっている際に、「うちの子供が日本語のクイズ大会に参加するといふのでここ数日張り切って勉強している。こんなに熱心に調べものをしている姿は今まで見たことがない」と店員と客がカウンター越しに話している場面に出くわした。これはデボンポートという特に小さな田舎町での出来事であるので過剰な一般化は避けねばならないが、こうした子供の姿を見てもらうことは保護者にとって日本語学習をサポートする動機になりうるし、保護者同士のネットワークを通じても子供が経験するポジティブな日本語学習体験の期待や記憶が拡散していくことが予想できる。その話を聞いた保護者仲間が「そんなに熱心に楽しんで勉強してくれるのなら、自分の子供にも日本語を学習させようか」という気になればアドボカシーとして大きな成果といえるだろう。また、子供が楽しんで学習する姿はそれを応援するために保護者が映画上映会などのイベントに足を運んでくれる機会に繋がるものと思う。

③については①のために企画した複数校参加のクイズ大会という非日常の要素が作用して、教師が放課後に集まることとなったとも考えられる。自身の生徒の学習体験や、生徒からのフィードバックを他校の日本語教師とシェアしたいという気持ちもそこには含まれているのではないか。その結果、JATNET という教師会を擁しているが、強いリーダーシップを発揮する存在がいない同州において、ネットワーク強化にわずかながらとはいえ貢献できたと言えると思う。

最後に④の校長へのアドボカシーであるが、上述したように今回は成功したとは言えないものの、イベントをホストしてくれた学校の校長はクイズ大会を覗きに來たり、個別に面談時間を設定してくれたり、ネットワーキング・ドリンクに参加してくれたり、①があったがゆえにアクセス可能となったと思われるケースがあった。学校長としては、学校内で起こっていることを把握しておきたいと考えるのは当然であるし、自身の学校が複数校によるイベントの会場になっていることは保護者や学校コミュニティへのセールスポイントとなる。

上記のことから、ポジティブな日本語学習体験を学習者に提供すること（①）そのものも十分有効なアドボカシー活動となりうるという示唆が得られた。さらに②～④についていえば、学習者奨励活動を中心に据えて各種アドボカシー活動を行うことにより、アドボカシー活動の

みを単独で実施する場合には望めない相乗効果が生じ、アドボカシー効果が強化されるという結果が観察された。校長や保護者のみを対象とした説明会の実施よりも、学習者を巻き込んだ形を取ったほうが、学校コミュニティへのアクセスが容易であり、かつ日本語教育が提供できるものを直接目で見て体験してもらえる分、効果的であった。

しかしながら、複合型企画であるが故の困難も多かった。まず、企画運営にかかる負担が大きかった。当然ながら、連絡先が多く、連絡回数も相当量になる。また、上述した映画上映会に保護者を巻き込むことに失敗した例に顕著のように、関係する人員も多くなるため、すべての関係者が目的や内容について理解を同じくできていなかったのは大きな反省点である。新企画ということもあり、当センター内の関係者でさえイベントの最終形について同じ絵を描けていない面もあった。改善点としてはイベントの最終形及び意図や目的などを文書化し、企画運営に関わる関係者全員と共有することである。

また、今回は地元紙に1件記事として取り上げられたが、次回からはより戦略的にマスコミ露出を目的としたプレスリリースの発出などを行うことにより、さらにアドボカシー効果が高まると予想される。

5.2 今後の展望

本節では今後の展望について考えたい。まず、現地化の問題がある。すでに今回の企画の評判を耳にした他州からも同形態の事業実施につき要請が寄せられており、タスマニア州だけを対象として当センターがこのような形で関わり続けることは人員的にも予算的にも現実的ではない。将来的にはこのような企画も現地の日本語教師会が主導し、当センターは主催ではなく協力機関となる方向で進んでいくことが望ましいと考える。まずタスマニアについては2015年7月末にJATNET主催の日本語教師研修会に出講し、クイズの構成、内容、また作成の意図などを説明し、それぞれの教師が各自クイズを増やしていけるよう道筋をつけた。今後、他州にも今回の企画で得られた知見を共有していきたい。また、各地の教師が、自分たちでも授業等で活用できるように、クイズ問題の共有化を進めている。方法としては、先述の Classroom Resources サイトにタスマニアで使用したクイズの一部を改訂したものをアップロードした⁽¹⁰⁾。今後更に問題を追加していく予定である。

また、学習者はもちろんのこと、校長や保護者と常に対面している日本語教師自身が優秀なアドボケーターである必要があり、教師自身にその自覚を持ってもらうことが肝要であると考えている。そのため、次の目標のひとつとして、日本語教師にアドボカシースキルについて考えてもらう教師研修の開発に取り組んでいきたい。学校内で日本語プログラムを守っていくのは日本語教師の力量に負うところが大きい。上述したように、クイズ大会について積極的にニューズレター等で発信し、学校長や保護者に日本語プログラムをアピールすることに成功した

教師もいる。学校コミュニティに「日本語プログラムを持っていたよかった」と思ってもらうかどうかは現場の教師の意識と実践能力に掛かっている。

また、Tohsaku (2014: 11) によれば、有効なアドボカシーのためにはすぐに提供できる信用に足るデータを常備しておくことが必要とされている。今後は校長や保護者にわかりやすく提示でき、かつ学習者にとっても魅力的なアドボカシー・ツールを作成する予定である。まずは、ロサンゼルス日本文化センターのウェブサイト SPEAK JAPAN⁽¹¹⁾を参考にした、オーストラリア向けアドボカシーサイト及びそれに付随した配布物などの作成を考えている。これは当センターがイベントを実施するときに使うだけではなく、教師自身が学校内外でアドボカシー活動を行うことをサポートすることにも貢献できると考えている。

また、今回は MCJLE との協働により成果を上げたが、外部機関との協力関係も今後より一層追及していくべきであると思われる。一例であるが、在外公館のプレゼンス（学校長へのアクセスが容易になる）や、JNTO と組んで保護者や教員向けに教育旅行のプロモーションを実施するなど可能であろう。特に後者については、日本を含む海外への教育旅行が一般的な当地にあって、訪日旅行のし易さは学校にとって日本語の学び易さのひとつとして理解されると考えられる。すなわち、「日本語教育」の重要性を強調するだけではなく、「日本」自体の魅力を総合的に伝える工夫が必要だと思われる。オーストラリアでは日本の英語教育とは異なり、外国語は高校卒業にあたっての必修科目でもなければ大学入試に必要な科目でもないため、ごく限られた数の生徒のみが外国語を高学年まで継続して学習しているのが実情である（全12年生の12.8%。アジア言語に限ると5.8%⁽¹²⁾）。このような中では、まず外国語教育の有用性をアピールした上で、他言語と比べてなぜ日本語を選択することがメリットとなりうるのか、すなわち上述したように、豊富な教材、国際交流基金や MCJLE をはじめとする日本語教育支援団体、教師研修機会、教育旅行のし易さなどを含めた総合的な意味での日本語学習環境の充実について多様なチャンネルを通じて訴えていくことがアドボカシー活動となり得るのではないだろうか。

6. 終わりに

以上、本稿では当センターが実施したタスマニアにおけるアドボカシー活動について報告した。従来単発で行われることが多かった教師研修及び学習者奨励事業をアドボカシーの観点から複合型事業として発展統合し、校長や保護者へのアクセスを試みつつ、それぞれのイベントによる相乗効果を狙ったものである。第1回目の試みとして、企画は概ね成功したと言えるがいくつかの課題が明らかになった。日本語教育が根付いているオーストラリアであるが、上述した通り他言語のアドボカシー強化などにより、日本語の地位が相対的に低下しているとも考えられる。今後ますます日本語教育としてのアドボカシーが必須となっていくと考える所以で

ある。

本論で詳述した通り、ここでいうアドボカシーとは校長や保護者への直接的働きかけはもちろんのこと、各教師のアドボカシースキル向上促進など多様な形態が考えられるが、それらは単独で行う場合よりも、学習者へのポジティブな学習体験の提供を伴うことで、より高い効果が望めるという示唆が得られた。今回のこのタスマニアでの経験を生かして、他の地域でも同様の企画をより進化・洗練されたかたちで展開していきたいと考えている。

〔注〕

- ⁽¹⁾ Australian Bureau of Statistics「Australian Demographic Statistics, Dec 2014」<<http://www.abs.gov.au/ausstats/abs@.nsf/mf/3101.0>> 2015年8月19日参照
- ⁽²⁾ 日本語教育担当プログラム・コーディネーターは現在3名おり、各種イベントの運営に責任をもつ事務担当スタッフである。
- ⁽³⁾ NSJLEの概要については中島（2014）を参照。
- ⁽⁴⁾ 概要は<https://www.jpfi.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/australia.html>のうち「最新動向 1. 全国統一カリキュラム（Australian Curriculum）」を参照のこと。また、同カリキュラムと日本語教育との関わり方については、『オーストラリア・カリキュラムの輪郭』（Draft Shape of Australian Curriculum）の外国語教育部分を執筆した南オーストラリア大学 Scarino 准教授による Scarino（2014）を参照のこと。
- ⁽⁵⁾ ILL については国際交流基金「日本語教育 国・地域別情報 《オーストラリア》（2014年度）」を参照。
- ⁽⁶⁾ Australian Curriculum「General capabilities in the Australian Curriculum」<<http://www.australiancurriculum.edu.au/generalcapabilities/overview/general-capabilities-in-the-australian-curriculum>> 2015年8月23日参照
- ⁽⁷⁾ 妖怪ウォッチ「【妖怪ウォッチ】ようかい体操第一」<<http://www.youkai-watch.jp/yw/taisou/>> 2015年12月16日参照
- ⁽⁸⁾ 国際交流基金シドニー日本文化センター「Classroom Resources」<<http://jpfsyd-classroomresources.com/>> 2015年8月19日参照
- ⁽⁹⁾ 日本の高校2年生と3年生に相当。
- ⁽¹⁰⁾ クイズ問題は次のリンクから閲覧できる。<<http://jpfsyd-classroomresources.com/r141.html>> (Japanese Food)、<<http://jpfsyd-classroomresources.com/r140.html>> (About Japan) 2015年8月19日参照
- ⁽¹¹⁾ 国際交流基金ロサンゼルス日本文化センター「SPEAK JAPAN」<<http://speakjapan.jflalc.org>> 2015年8月19日参照
- ⁽¹²⁾ The Diplomat「Australia's Foreign Language Deficit」<<http://thediplomat.com/2014/07/australias-foreign-language-deficit/>> 2015年8月24日参照

〔参考文献〕

- キャシー ジョナック・根岸ウッド日実子・松本剛次（2008）「オーストラリアの初中等教育における外国語教育の現在と国際交流基金シドニー日本文化センターの日本語教育支援—Intercultural Language Teaching and Learning の考え方を中心に—」『国際交流基金日本語教育紀要』第4号、115-130、国際交流基金
- 国際交流基金（2013）『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より』、くろしお出版

中島豊 (2014) 「第1回全豪日本語教育シンポジウムの報告」『国際交流基金日本語教育紀要』第10号、145-152、国際交流基金

de Kretser, A. & Spence-Brown, R. (2010). *The Current State of Japanese Language Education in Australian Schools*. Education Services Australia Ltd: Carlton South.

Lo Bianco, J. (2009). *Return of the Good Times? Japanese Teaching Today*. Japanese Studies, 29(3), 331-336.

Scarino, A. (2014). The development of the Australian Curriculum and implications for Japanese language education. In Kinoshita Thomson, C. (Ed.) *National Symposium on Japanese Language Education Proceedings 2012: Creating the Future*. (pp.15-29). Sydney: The Japan Foundation, Sydney.

Spence-Brown, R., Absalom, M., de Kretser A., Kirby, K., Stevens, C., Kinoshita Thomson, C., Tohsaku, Y.-H. & Anderson, K. (2014). Plenary Panel Discussion. In Kinoshita Thomson, C. (Ed.) *National Symposium on Japanese Language Education Proceedings 2012: Creating the Future*. (pp.51-70). Sydney: The Japan Foundation, Sydney.

Tohsaku, Y.-H. (2014). Japanese language education in the global age: new perspectives and advocacy. In Kinoshita Thomson, C. (Ed.) *National Symposium on Japanese Language Education Proceedings 2012: Creating the Future*. (pp.3-13). Sydney : The Japan Foundation, Sydney.

〔参考ホームページ〕

国際交流基金「日本語教育 国・地域別情報 <<オーストラリア>> (2014年度)」

<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/australia.html>> 2015年 8 月19日参照